

# うるわ 美しきまち ことうら 観光協会だより

特別号

小泉八雲・セツの新婚旅行  
琴浦町を訪れて130周年

小泉八雲・セツの新婚旅行  
琴浦町を訪れて130周年

琴浦町 130年の時を超える

発行者 琴浦町観光協会

〒689-2502

鳥取県東伯郡琴浦町別所10301

道の駅「琴の浦」道路 観光情報棟内

TEL: 0858-55-7811 FAX: 0858-55-7800

kanhou-yukai@town.kotoura.tottori.jp

2021年2月発行



## 新婚旅行 イメージウォーキング計画

本年、観光協会ではこの130周年を記念して「130年の時を超える 小泉八雲・セツ新婚旅行イメージウォーキング」(仮称)実施回数は年2回を予定(日程は未定)しています。

小泉八雲の曾孫小泉凡さん夫婦の参画を予定(松江市から)

コース  
鳴り石の浜～花見湯墓地～神崎神社～塩谷定好写真記念館～菊港～流政之作の波しぐれ三度笠～鳥取林養魚場～江原酒造本宅(鳥取建物100選)～小泉八雲・セツ参訪記念碑～旧中井旅館～酒井片桐飛行殉難碑～津田家墓地～逢東あじさい公園 種田山頭火の句碑～宝製菓

上記の計画案は未確認、未調整の部分があります。

## 八雲の後任は夏目漱石

八雲のプロフィールについてはインターネットなどで情報を得ることができます。彼は20歳までに多くの不幸な出来事を体験しています。両親の離婚、遊びの中で片方の目を失明、父の死亡、経済的な支えであった叔母の破産、そのため学校中退、経済的に困窮の状態のなか移民船で一人イギリスからアメリカにわたります。

彼はギリシャ・アイルランド・フランス・イギリス・アメリカ・仏領西インド諸島・アメリカに移動し日本にやってきました。そして松江・熊本・神戸・東京と移動し、当時の東京帝国大学の英文学講師として約6年間生徒たちを教えます。退任後の後任はイギリス留学を終えた夏目漱石です。

## 八雲の妻セツのこと

彼が日本、松江に来てから今年で131年目になりますが、その名前は今も広く多くの人々が知っています。今後も彼の残した作品「怪談」「知られぬ日本の面影」などの評価とともに私たちの記憶の中に刻まれていく存在です。

そしてなんとといっても、八雲を語るとき妻セツの存在は絶対的です。一例として著書「若き日のラファディオ・ハーン」訳者あとがきのなかで「(前略)セツという賢明な日本の婦人が与えられたことである。あれだけ日本と日本人を理解し、あれだけ世界に読まれた日本人に関する本を書き上げるには、ハーンと結

婚し、ともに暮らし、献身的な助力を捧げたセツ婦人がどれだけ貢献したかは計り知れない。」とまったく同感です。

## 過去をふまえて、 これからを考えましょう

小泉八雲・セツ夫妻が琴浦町に新婚旅行で来られて130周年。このことを過去のことにしてではなく、このことをどのように生かすか、観光協会はもとより町・地域・企業や団体などで、それぞれのようにつまみ分けるか、どのように評価すべきか、判断も持った思考・発想で、五感を研ぎ澄ました感性とオープンなマインド(Open Mind)で考えて見てはどうでしょうか。

## 追記

この記事を書くにあたり、小泉凡小泉八雲記念館長・小泉祥子コーディネーターから親切なアドバイスを、ご配慮をいただきました。貴記念館の多くのみなさまのご理解をいただきながらつくることができました。ありがとうございます。

## 引用文献

「ラファディオ・ハーン著作集」14巻 P427、P436 恒文社  
「新編 日本の面影」池田雅之 訳 P187、P190 角川ソフィア文庫  
梶谷泰之著「ヘルン先生生活記」P201、P203 恒文社  
O・Wフロスト著／西村六郎訳「若き日のラファディオ・ハーン」P279、P280 みすず書房



小泉八雲（ラフカディオ・ハーン Patrick Lafcadio Hearn）は日本の盆踊りに大変興味がありそれを見ようと、妻セツと新婚旅行もかねて赤碕・八橋・逢東を訪れて130周年になります。明治24年（1891年）8月松江から日本海に沿って伯耆・因幡の旅に出かけています（盆踊りがなかった原因は、コレラ流行のための禁止であったらしい）。舟や人力車での旅で、山陰本線はまだ開通していない中での新婚旅行です。

## 元気づくりを考えよう

新婚旅行から130周年。今、あらためてこのことにスポットライトをあてて、地域の元気づくり、観光の振興、商品の販売戦略、琴浦町の魅力アップづくりなどのヒントになりはしないか、五感をフル活用しオープンなマインド（Open Mind）で考えて見てはどうでしょうか。地道ではありますが少子高齢社会の状況下での元気づくりにつなげたいものです。

## 思いがけない発見

赤碕花見潟墓地・八橋・逢東は八雲夫妻にとって出発時のイメージとしては単なる移動空間の一部にすぎなかったはずですが、八雲は手紙のなかで「わたしは八橋（Hasegawa）を発見しました」と表現するくらい感動を覚えて、現在の琴浦町のことを随筆や手紙に残しています。

## 赤碕、花見潟墓地

赤碕の花見潟墓地、八雲は随筆「日本海に沿って」でつぎのように記述しています。その一部を紹介します。

「二 陰曆7月15日、私は伯耆国にいる。（中略）三 左手に青くうねる海の波、右手には青田の緑の波がひたすら続く中を旅していると、ほどなくして、その波が途切れた。灰色の墓地だ。それはあまりにも長く、林立する広大な石の群れを抜けるまで人力車が全速力で駆けたが、まるまる15分かかった。墓地が見えてくれば、きまってもうすぐ村だ。（中略）その家々に暮らすこの村の住人の何千何万倍もの数の死者たちが、この墓場には静かに眠っているのだろう。（中略）お盆と見えて、この墓地にも、新しい墓石の前に新品の白い盆灯籠が見える。今晩は華やかな町の夜景でも見るかのように、墓場にも煌々と光が灯ることだろう。しかし、灯籠のかかっている墓も数知れずある。（中略）故人を呼び返してくれる人もいなければ、懐かしんでくれる地元の人もない——そんな影の薄い、遠い過去の人たちの墓である。その人たちの生涯に関わることは、もうすべてとうの昔に忘れ去られてしまったのだ。」



## 八橋

八橋のことはバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）当時の東京帝国大学教授に宛てた手紙の中でつぎのように書いています。

「1891年8月18日 八橋 親愛なるチェンバレン教授。―わたしは八橋（Hasegawa）を発見しました。ヨーロッパ人でここへ来た者は、今まで誰ひとりいなかったようです。（中略）八橋はきわめて静かな、美しい小さな町です。（中略）立派な旅館が1軒あり―それに素晴らしい浜辺です。

しかし不思議といえば舟が一艘もありませんし、ここでは子供以外は、人々は誰も海に入ろうなどと思わないのです。そんなわけで、わたくしが海に泳ぎにゆきますと、いつでも町中の人々が総出で浜辺まで見物



## 逢東

逢東は1891年8月20日 由良から出した手紙にその記述があります。それは各集落での盆踊りに大変興味があった八雲は日本の着物を着て12人ばかりの八橋の人たちと一緒に逢東に見物に出かけます。八雲はその手紙のなかで、

「わたしは八橋ではとても愉快でした。眠り、食べ、泳ぎ、まったく快適です。逢東では、まったく特別な冒険をしました。」とあります。それは盆踊りを踊っていた逢東の人たちが、外国人が見物に来たというので、酒を飲んでいた人もいて盆踊りをやめ、外国人を見物するなり、砂や水をかけるなどして少しいたずらをしました。

翌日、町の主だった人や警察が来て陳謝したので今度は「こちらが恥ずかしいほどであった」

### 妻セツも

「前略」ようやく盆踊りを見つけてまいりますと、反対に西洋人が来たというので、踊りそののけにして、いたずらに砂をかける者がある。あとから謝罪に来ると云うような珍事もございました。（後略）」と八雲が亡くなって約10年後の「思い出の記」の中で印象深く書いています。

## 小泉八雲・セツ 来訪記念碑のこと

八雲54年の生涯。結果論で言いますと、この時期が一番幸せであったときではなかったのでしょうか。そのような想いのかで観光としても生かすべく、平成16年3月に「小泉八雲・セツ来訪記念碑」を八橋海水浴場に建立しました。この記念式典に高齢のおばあさんが参加されていて、おばあさんは、「わたしは祖父から聞いています。小泉八雲夫妻が人力車に乗って八橋に來られた時のことを。」と、強い想いを込めておっしゃっていたことを、今でもはつきりと覚えていています。



平成16年4月「小泉八雲・セツ来訪記念碑」除幕式の時の記念写真で最前列右から5人目が八雲の曾孫小泉凡氏（当時東伯町長米田義人氏の右隣）、左から4人目

